



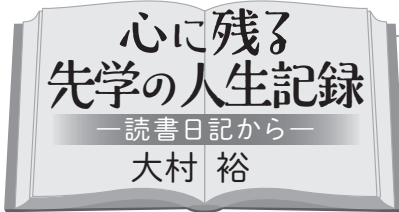
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.217
2021.10.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第24回

本間健彦

『「イチョウ精子発見」の検証 平瀬作五郎の生涯』

(新泉社 2004年)

平瀬作五郎(1856~1925年)は、人類学者の鳥居龍蔵と同様、世界的業績を挙げながら、それ故に東京帝大から排除された独学の植物学者である。考古学研究者ではないが、鳥居とあまりにも似たような運命をたどった学者として私の心に残っている。今回は彼の半生を紹介してみたい。

平瀬は、学制が行なわれる前に設置されていた福井藩の「中学校」を卒業している(1872)。その後美術を私塾で学んで中等学校などの教師となったが、国が認定する学歴を持たないために、最下級の身分に留められる。薄給を補うために図画の教科書を執筆するがこれが当たり、何と彼が作成した教科書類は軒並み60年近く現場で使用されていたという。その副収入を糧に、帝国大学理科大学(後、東京帝国大学理学部)植物学教室の「雇」として、中学校教員よりさらに薄給の画工になる。彼は、教授たちの論文に使用する資料の図化を進めるうち、植物学の基礎を知らなければ図化に支障をきたすので、独学でこの方面の勉強をし、ひとかどの研究者の力量をつけたのであった。彼の名が世界に知れ渡ったのは「イチョウ精子の発見」である。

当時イチョウは、花粉の受粉で子孫を増やすのではなく、精子による生殖を行なっている可能性がドイツのホフマイスターによって予言されていたが、観察で証明した研究者は誰一人いなかった。イチョウの生殖は年にたった一日かぎり(9月のある日)であり、ほんの短時間で終わってしまうので、時機を逃したら観察出来ないからである。現代日本の生物研究者でも、この幸運に恵まれた者は10人程度であるという。この難事業を平瀬は独力で成し遂げたのである。平瀬は毎年秋に小石川植物園に通い、イチョウのざんなんを、一定時間ごとに採取してはプレパラートを作り、受精する状態を顕微鏡で観察し、ついにそれを捉えることに成功したのである。この発見がどれほどの価値があるのか、門外漢の私には分からないが、著者は「ダーウィンの進化論に匹敵するもの」であると主張している。

さてこの作業は連日徹夜で、トイレに行く間も惜しんで続けられたという。そしてこの一連の成果は邦文、英文、仏文、独文で内外に発表されたのであるが、著者は、独・仏・英文を平瀬が自由に操ることは難しかったであろう、と推測する。恐らく海外の関連文献を読んで必要な情報を提供し、平瀬の論文を外国語に翻訳してやったのは、牧野富太郎の証言を信ずるなら、平瀬と親しかった池野成一郎(当時帝国大学農科大学助教授)であったろうと指摘するのである。おそらく真相はそうであろう。このお陰で「Hirase」の名は海外に轟くのであるが、ここから平瀬の悲劇が始まる。学歴もないまま世界的に著名な研究者になった以上、東京帝大としては学位の配慮やそれなりの学内の地位を保証せざるを得なくなる。しかし東京帝国大学の権威が確立していた当時あっては、帝大卒→官費による外国留学、というコースを辿った者でなければ、学位

の取得や助教授・教授のポストの就任は考えられないことなのである。こうした一群の人々の中に無学歴の平瀬が割って入れば、秩序が混乱する。案の定、平瀬の処遇を巡って学内では対立が起き、教授間の分裂、ひいては大学の将来にもかかわる事態となり、これに苦慮した平瀬は大学を自ら去り、滋賀県の中学校教師に転身して行くのである(1897年)。

この辺の経緯は世界的人類学者・鳥居龍蔵のそれと全く一致する。「小学校中退」ながら「下等科は修了している」(長谷川賢二氏)との新説あり、独力で様々な基礎的教養を身につけ、国内はおろかシベリアやアジア各地を踏破・調査して、貴重な学術報告を日本語やフランス語で次々に公刊した結果、フランスから「パルム・アカデミー勲章」を授与されている。世界的栄誉を追い風に、鳥居は文学博士の学位を受け、東京帝国大学において助教授にまで昇進を果たすが、1924年に突如大学を辞めてしまったのである。鳥居が東京帝大を辞めた直接の理由は、同僚の松村瞭講師の学位請求論文の審査における不透明な経緯であった。すなわち、鳥居が一旦却下した松村瞭の学位請求論文(人類学分野)が、医学部の小金井良精と植物学の藤井健次郎両教授によって審査され、鳥居もこれに同意せよと迫られたのであった(鳥居龍蔵『ある老学徒の手記』朝日新聞社 1953年 207~208頁)。藤井は松村瞭の父・松村任三の弟子であったから、父親から何らかの働きかけがあったのは確実であろう。松村任三を中心とする学内の複雑な人脈によって鳥居は弾き出されたのである。

さて、肝心の平瀬のことである。彼は中学校の教員になってから15年後、帝国学士院恩賜賞を受賞する。無学歴の彼には破格のことと言ってよいが、この受賞の陰には、上述の池野成一郎の好意があった。池野が同章の受賞にあたり、「平瀬君がもらわないのなら、私も断るよ」と受賞を伝達に来た当局の係員に通告したのである。池野による平瀬への肩入れは尋常なものではない。先述したように、平瀬の研究に対して語学面で積極的な協力をし、国内に向かってもその研究の意義を書評で取り上げているのである。しかも、「世間では自分が指導して平瀬君に研究させたように云ふて居るが、其の反対で平瀬君の研究に刺激されて自分のソテツの精虫発見となったのだ」と主張している。

「これだけの業績(イチョウ精子の発見)が教科書に載らないのはなぜなのだろうか?」というのが本書の著者・本間健彦の一貫した疑問である。これに対し、筑波大学名誉教授の堀輝三は、本書の「解説」において「平瀬作五郎が生え抜きの学者ではなかったからです。」と直截に答えている。イチョウ精子発見の業績も「実は池野成一郎のもの」という見方が専門研究者の間に定着をしているようである。しかし池野自身はそれを強く否定している。平瀬の研究者人生は、決して恵まれてはいなかったが、池野のような素晴らしい学者を友人に持ったという点で幸せな男だったというべきである。

*巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第24回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第210回) 藤井佐由里 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第21回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「科学を育む査読の技法」 村本周三 …4

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえました(第21回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

最後のサバティカル(1989)とこれも最後の役職(1991-96)

21.1. サバティカル研修:環状土籬と亀ヶ岡現象

前回に紹介したような考古学の科目の授業をしつつ、新設間もない東アジア研究センター長と東アジア言語・文学科長を兼任し(18回、No.211)、これも発足したばかりのカナダ日本研究学会の第一回大会をモントリオールで主催したり(19回、No.213)で、1988年代の後半はずいぶん忙しい毎日をおくっていた。学科長・センター長のお役が終わった翌年の1989年は12ヶ月のサバティカルが許可され、国際交流基金に申請していた研究費もOKとなったので、久しぶりに、自分の研究をする機会をつくることができました。7年に一度とれるサバティカルはこれが3度目、そして引退の年が近づいているのでこれが最後となる。この度の研修テーマは列島北部の縄文後・晩期に見られる環状土籬やストーンサークルに象徴される地域社会の構造を、北米の北西沿岸部や当時のソ連沿海州などの狩猟栽培民について各国の研究者が提出している理論に照らして解明してみようということだった。2度の資料採集旅行を計画、一度目は6、7月の2ヶ月、2度目は10月から11月にかけての1ヶ月。いつもお世話になっている芹沢長介、佐原真、小林達雄、吉崎昌一、林健作、菊池徹夫をはじめとする諸先生から貴重なアドバイス、紹介状をいただき、北海道千歳の有名なキウス遺跡から大湯のストーンサークル、亀ヶ岡遺跡などを見直し、多量の文献資料を集めることができた。東京では早稲田大学で交換条約による外来研究員として大学の施設を使わせていただき、京都では国際日本文化センター(日文研)で埴原和郎先生を代表者として進行中の「日本文化の基本構造とその自然的背景」と題する共同研究プロジェクトに客員研究員として参加させていただいて「日本と北米の狩猟採集民一特に日本列島北部の縄文後・晩期について」と題する発表をした。さらにその年の8月にシアトルで開かれた『環太平洋の先史時代』と題するカンファレンス(Circum-Pacific Prehistory Conference)では、日文研の安田喜憲博士と北大の五十嵐八枝子博士からご教示いただいた資料を大いに参考にさせていただいて、環状土籬という現象を自然環境の変動に位置付けることを試みた。

21.2. 準副学長としてアジア方面との提携強化(1991-96)

シアトルのカンファレンスでの発表はエイケンズ、リー両氏共編の論集(C. Melvin Aikens & Song Nai Rhee, eds, 1992)に所収されているが、これをもう少し拡大した形をにしようと思っていたところ、サバティカルの翌年からまた役職に就くことになった。この度は前の役目より二段ほど上の職で、Associate Vice-Principal (Academic) という役名、教務担当の準副学長とでも訳せばよいのか。大学本部の管理職にも女性を入れなくてはという気運が出てきた頃だったので、教務担当の副学長に任命された男性の生物学者の補佐役としての準副学長には人文系の女性候補者を意識的に探したときいている。現在はマギル大学の学長も人文学部長も女性だが、当時、女性で準副学長レベルの職についたのは私がはじめてだったようだ。

21.2.1. 交換協定の整備 大学本部での私の仕事場は学長室の隣の部屋。当時の学長はデイヴィッド・ジョンストン(David Johnston) 法学部教授で、この後2010-2017年にはカナダで英国女王を代表するカナダ総督(Governor General of Canada)に就任された方だった。お隣の部屋から時々ふらりとはいってこられておしゃべりした際、マギル大学の国際性に関する話題がよくでた。本学はカナダの中でも外国から来ている学生の率が一番高くて、全体の約1/4をしめるということは前にも触れた(20回、No.215)が、1991年頃の“諸外国”のほとんどがUSAまたはヨーロッパの諸国だった。交換協定校のリストについても同様。しかも驚くほど多数の大学と交換協

定を結んでいるにも拘らず、協定に基づく留学生は、マギル側も諸外国側も非常に少なかった。それは、協定による短期留学のための手続きが非常に煩雑で、いろいろな書類をアチコチの窓口から集めてこなければならぬので、よほど熱心な人でない限り、交換留学はあきらめてしまうということらしかった。そのようなことについて学長とお喋りした結果は、私がアジア方面に出る機会を利用して、太平洋の向こう側の教育・研究機関との提携を強化して、マギル大学の“国際性”をもっとバランスの取れたものにしようということ、そして、交換留学を促進するために留学生の送り出し・受け入れの手続きを整備しようということが私の仕事の項目に加えられた。

21.2.2. 夏期英語研修

その頃、日本の諸大学の学生が夏休みを利用してUSAやUKへ英語研修にでるのが目立ちはじめていた。マギルへも来てもらいましょうという話がでて、そのようなプログラムを大学のどこかに設置するのも私の仕事の一部となった。英語夏期研修の話が出たのは私が1991年に就任して間もない時だったが、東アジア研究センターの客員教授としておいでいただいた、津田塾大学の飯野正子先生(18回、No.211)をはじめとする日本での知り合いの方々のご尽力で、翌年の1992年にさっそく開講することができた。開始当時のプログラムのタイトルは“Summer Studies in English and Canadian Culture”、英語だけでなくカナダの文化を学んでいただくという趣旨で、4週間の研修の午前中は英語、午後は博物館や原住民集落の見学などにあて、週末にはオタワの国会議事堂、オプションとしてナイアガラの滝や赤毛のアンで有名なプリンスエドワード島への小旅行などもみこんだ。現在プログラムの内容はかなり変わっているが、30年前に飯野先生たちのご尽力ではじまった夏期研修は「アジア人学生のための夏期英語イマージョンプログラム」として今も継続しており、毎年100人前後の学生が日本から参加している。



21.2.3. 日本での考古学実習 準副学長の任務とは直接関係はないが、私が準副学長室にいた1994年から数年間、「考古学実習」という科目を夏学期に提供して、マギルの学生を日本での行政発掘現場の作業員として参加させていただくことを試みた。滞在期間4週間のうち最初の1週間は奈良文化財研究所の宿泊施設などに合宿してオリエンテーション、続いて発掘現場に分散配置して発掘作業を経験するという仕組みだった。学生を受け入れて下さった各地の文化財センターの方々は何論、プログラムの構成、学生の配置などについて、北上市埋蔵文化財センターの稲野裕介氏、国学院大学の小林達雄氏、奈良文化財研究所の松井章氏、大阪市考古資料センターの岡村勝行氏、天理大学の置田雅昭氏などに大変お世話になった。学生にはとても好評なプログラムだったが、1997年あたりから経済状態を反映して学生の配置が困難となったので中止したままになっている。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学部研究科(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員 2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 210

一乗谷朝倉氏遺跡 ～福井県福井市

藤井 佐由里

国の特別史跡に指定されている一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国時代に越前国(現福井県)朝倉氏が、領国支配の本拠地とした戦国城下町の遺跡です。下の写真の、狭小な谷底平野に戦国期の城下町が広がっていました。



▲特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 俯瞰写真(北から)

朝倉氏はもともと、但馬国朝倉庄(現兵庫県)を名字の地とする一族でした。南北朝時代に越前国の守護であった斯波氏に従って但馬から越前に入ったと伝えられています。越前入国後、朝倉孝景は主家である斯波氏を追放し、朝倉氏が5代にわたって越前国を治めることとなります。孝景以降、一乗谷の地は朝倉氏の本拠地として約100年間にわたって繁栄しました。しかし、一乗谷の城下町は、天正元年(1573)、天下統一を目指す織田信長の侵攻によって焼き払われてしまいました。信長の侵攻により朝倉氏は滅亡し、一乗谷の城下町も廃絶しました。その後、一乗谷の地は都市として再興されることなく、約400年もの間、手つかずの状態ですら眠ることとなりました。

長い年月を経て、一乗谷で最初に遺跡の発掘調査が行われたのは今から約50年前の昭和42年(1967)のことです。継続的な発掘調査により、遺跡からは当時の人々の暮らしや文化を示す貴重な遺構や遺物が多数発見され、戦国期の様相が次々と明らかになっています。特に、1つの遺跡内で複数の庭園遺構が発見されている事例は全国的にも珍しく、戦国大名の文化を知る上で貴重な事例といえます。

こうした歴史的価値を有することから、昭和46年(1971)に一乗谷城を含む278haが国の特別史跡に指定され、平成3年(1991)に諏訪跡庭園、湯殿跡庭園、朝倉館跡庭園、南陽寺跡庭園の4つの庭園遺構が特別名勝に指定されました。加えて、平成19年(2007)には数多くの遺物の中から2,343点が重要文化財に指定されました。

また、本遺跡では、発掘調査をはじめとした継続的な調査研

究に加え、遺跡の整備が行われ続けています。特に、本遺跡内では露出展示や建物復元など、遺構の特徴に合わせた展示手法が用いられており、遺跡を訪れた人たちにより効果的に当時の暮らしを感じてもらおう工夫がなされています。加えて、遺跡内では現在も人々の暮らしが続いており、戦国期から現在まで遺跡の景観が守られてきました。一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国期から現代まで続く景観の中で、往時の遺構や遺物と触れ合うことができる稀有なサイトミュージアムであるといえます。この貴重な遺跡を今後も守り発展させ、次世代へと継承していくため、令和3年(2021)7月には、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡再整備等計画』が刊行されました。また、令和4年(2021)10月には新たに一乗谷朝倉氏遺跡博物館(仮称)が開館予定です。



▲遺跡内の露出展示



▲復原町並の様子

本遺跡は、私をはじめで学芸員として携わることになった遺跡でもあります。遺跡と向き合う日々は、驚きと発見の連続で、まだまだ私の知らない一乗谷の顔が沢山あると思います。この多くの魅力を持った遺跡をひとりでも多くの方に訪れて頂けるよう、今後も調査・研究に取り組んでいきたいと思っています。

参考文献:

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2021『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡再整備等計画書』

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは武井成美さんです。

考古学者の書棚

「科学を育む査読の技法」

水島昇 著／羊土社(2021)

村本 周三

はじめに

本欄の執筆を依頼された頃、初めて論文誌の査読をすることになり、査読について悩んでいた。そんなときに先輩が勧めてくれたのが本書である。考古学の話題を扱った書籍ではないが、分野を問わず論文投稿者及び査読者に関係する話題が取り上げられている。

考古学に関連する論文誌には、全国的な学会が刊行しているものの他にも、都道府県単位の学会やより小さな地域の研究会が刊行しているものもある。その中には、査読制により質の向上を図っているものも多い。しかし、論文の執筆については、無限とも言える数存在する論文を読むことで自習することができるが、査読については数少ない自分の論文が査読された際のコメント等しか学ぶ術がない。また、都道府県単位の学会やより小さな地域の研究会は会員数が減少、特に原稿の執筆や査読を含む学会等の事務を担ってきた中堅、若手層の減少が著しい。そのため、少数の会員に雑多な記事の執筆から事務までの負担が集中しつつあり、肝心の論文執筆に割ける時間を奪っているように思う。

本書の概要

本書は、『実験医学』の連載記事「論文査読のリアル ―査読で消耗しない心構えとテクニック―」に英文の例文集等を加えたものである。医学・生物学分野の論文誌の話題が中心であるが、査読そのものについて取り扱っており、査読のシステムやルール、査読者としてあるべき振る舞いを知ることができる。連載時の副題に「査読で消耗しない心構えとテクニック」とあるように、医学・生物学分野でも査読に要する労力は無視できない問題であるようで、効率的な査読についてもポイントが示されている。

本書の内容

本書は3部、

第1部 査読のリアル

- 1 査読の依頼がきたら
- 2 査読の心得
- 3 査読の実際
- 4 査読システムの試行錯誤
- 5 査読者へのインセンティブ

第2部 特別座談会

第3部 査読例文集

- 1 論文全体に関わるコメントに使える英語表現
- 2 具体的なコメントに使える英語表現
- 3 改訂版(リバイス)原稿へのコメントに使える英語表現
- 4 エディターへのコメントに使える英語表現
- 5 総説へのコメントに使える英語表現
- 6 やむを得ず辞退する場合に使える英語表現

で構成されている。



第1部は、ピュアレビューシステムや査読の心得、査読の実際の進め方、現在の査読システムの問題点や改良のための試行錯誤など査読者側が知っておくべきことが取り上げられている。また、査読者の立場から見た投稿者が査読者に負担をかけた論文を投稿するためにどの様な準備をすべきかについてのコラムが挟まれている。

第2部は、4人の医学・生物学の研究者により、査読のあり方についての座談会が収録されている。座談会の内容は第1部に準じるが、研究者による考え方の違いを知ることができる。特に、査読者は「建設的」であるべきか?という問題については意見が分かれており、査読者は掲載の可否を評価すればいいという立場から、論文を良くしたいという立場まで見解が示されている。

第3部は、英文で査読コメント等を書く際の英語の例文が示されている。英文で査読コメントを書く人にとっては直接参考になるであろうし、そうでなくとも例文を通して査読の際に確認すべき点やその指摘の仕方を知ることができる。また、査読コメントで頻出ということは、執筆者側としても、投稿前に十分に確認すべきポイントということになる。

おわりに ―解決した悩みと解決しない問題―

最後に本書のおかげで目処が立ったいくつかの悩みについて述べる。

第1は、査読等をどの程度引き受けるかという問題である。我々の世代は、返事は「Yes」か「はい」という教育を受けているため、依頼を断るとい文化がないが、逆に前述の負担増により締め切りを守ることがおろそかになりがちである。本書に示されている自分が発表した論文に関わる査読者の数を自分が査読すべき論文の数の目安としていれば、心理的に随分楽である。

第2は、どこまで査読する論文に関わるかという問題である。小規模な論文誌では、査読者は編集者を兼ねている場合があるため、本書に示されているように編集に関わる部分のコメントについては最小限に留めるとするのは難しいが、それでも論文は基本的に投稿者が責任を持つべきものという立場に立てば、査読の負担は随分小さくなる。

第3は、具体的なコメントの仕方である。第3部のコメント例は大いに参考になった。

一方で、新たに気づかされた問題点もある。前述のように本欄の執筆を依頼された頃に初めて論文の査読を引き受けたが、その後の数ヶ月で数本の論文の査読に関わった。名誉なことでもあり、これまで果たしていなかった義務が果たせることは嬉しいことでもあるが、担い手不足によりこれまで通り論文誌を刊行するのが難しくなる時期が近づきつつあるのではないかと感じている。

アルカ通信 No.217

発行日 2021年10月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : http://www.aruka.co.jp